

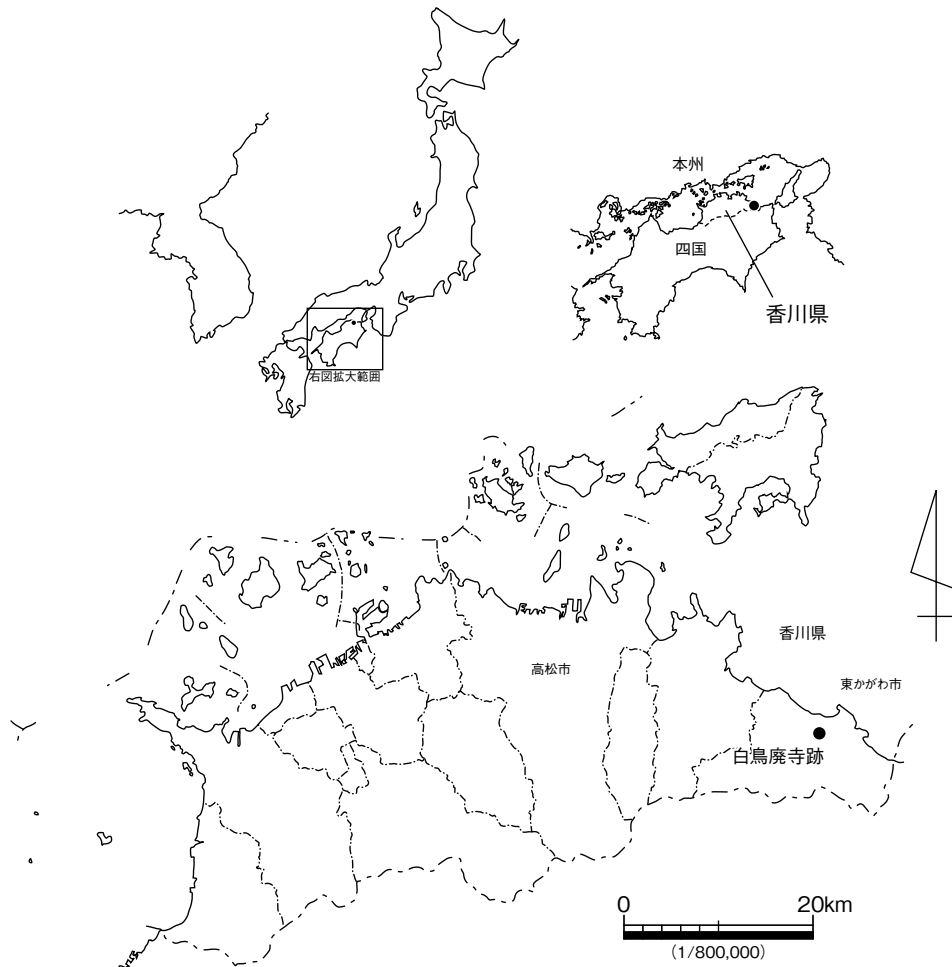
Ⅲ 調査研究

1. 白鳥廃寺跡の伽藍配置と変遷 — 1～3次調査の再検討 —

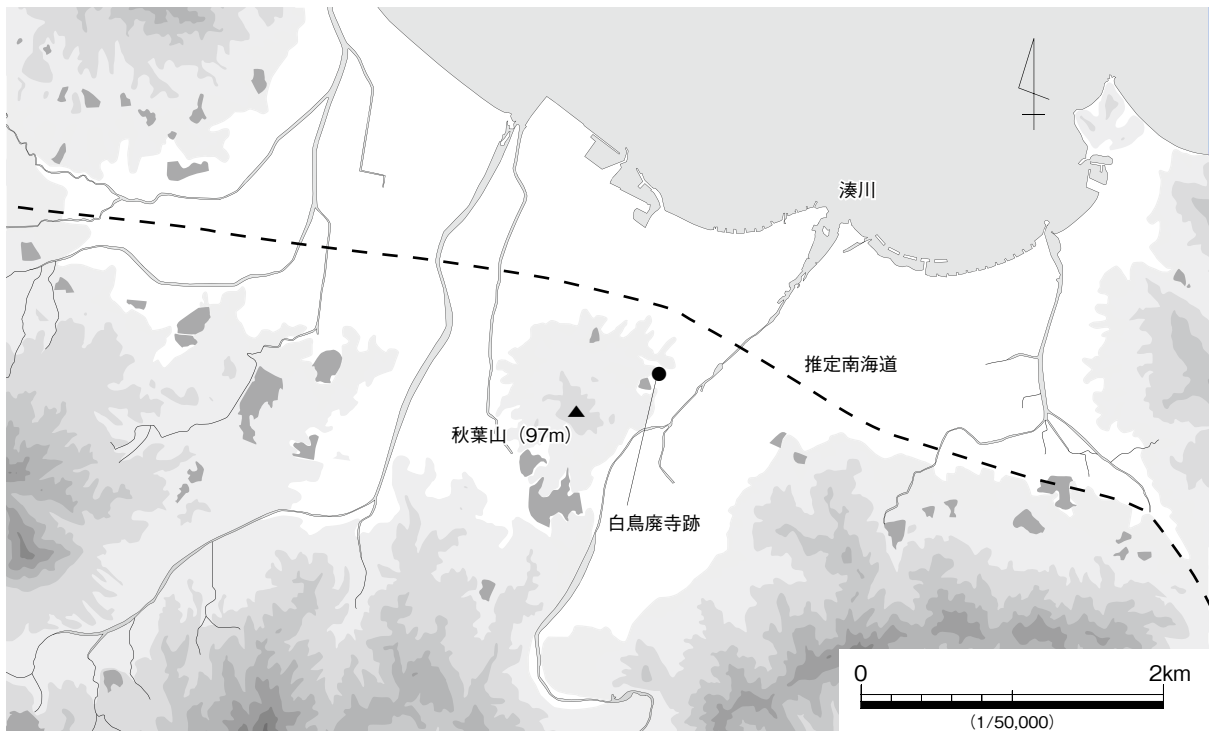
乗松真也

はじめに

白鳥廃寺跡は、香川県東かがわ市湊に所在する古代寺院である。白鳥廃寺跡は、北、西、南の3方を標高約97mの秋葉山から派生する標高15～20mの丘陵に囲まれ、西方を湊川で画された狭小な平地に所在する。この平地の北寄り、北西から伸びる2本の尾根に挟まれた谷の出口付近に伽藍域が広がる。これまで数次の発掘調査が実施されたが、1次調査を除いて簡略な概要の公表にとどまっている。2012～13年には白鳥廃寺跡の背後に隣接する山下岡前遺跡が香川県埋蔵文化財センターによって発掘調査され、山下岡前遺跡の一部が白鳥廃寺跡の寺域に含まれることが明らかとなった。現在、香川県埋蔵文化財センターでは山下岡前遺跡の発掘調査報告書を作成中であるが、同遺跡の評価には白鳥廃寺跡の調査成果が不可欠である。よって、本稿では香川県埋蔵文化財センターで保管している2・3次調査の記録や遺物を整理し、提示しておきたい。なお、2・3次調査の図面や遺物取り上げ記録には不備が目立ち、残されている写真も多くない。本稿は、こうした資料から可能な限り当時の調査記録を復元したもので



第28図 白鳥廃寺跡位置図1



第 29 図 白鳥廃寺跡位置図 2

ある点を断っておく。あわせて、1次調査の内容についても検討を加える。

1 1次調査の概要

1968年の年初、水田中に存在する高まりが土地耕作者によって削平された。その際、東側の高まり（塔基壇）から塔心礎と礎石9石、西側の高まり（西方基壇）から礎石数石が出土した。これ以前にも、水田中に残る高まりと周辺に散布する瓦が散布から、当該地点は古代寺院跡であると推定されていたが、塔心礎などの発見により古代寺院の所在が確実となった。土地所有者は心礎を地元の白鳥小学校に寄付する意向を持っていたが、白鳥町（現東かがわ市）が基壇2基を含む水田約40aを50万円で購入した。白鳥町教育委員会は白鳥廃寺跡の香川県指定史跡指定の申請を行い、この申請を受けて香川県教育委員会と白鳥町教育委員会は寺域の範囲と遺構の存在を確認するために1968年12月22日から1969年1月6日まで発掘調査を実施した。

塔基壇周辺のボーリング調査では、心礎から約6mの地点で石列と推定されるものを確認し、1辺約12mの方形基壇を復元した。西方基壇では、削平をまぬがれた箇所（西部）の上面の表土を除去し、礎石（11石）を検出した。検出した礎石の一部は柱座を有する。削平によってあらわになった西方基壇断面の精査により版築による基壇形成が明らかとなった。基壇の3辺（北辺、西辺、南辺）で石積の残存を確認し、さらに一部の発掘調査により石積の外側に敷石とみられる遺構を検出した。塔基壇、西方基壇の南北でも発掘調査やボーリング調査を実施し、北方建物、南方建物、回廊の位置を推定した。

1次調査の結果、白鳥廃寺跡の伽藍配置は以下のように復原された。

「まず伽藍の中央正面に南大門が、つづいて中門が配置され、中門の左右には回廊がとりついていた。この南大門、中門と考えられる遺構の中心線を延長すると北方建物跡の中心となり、この線が伽藍の中心軸線と考えて誤ないであろう。東西二つの土壇はこの中軸線からいづれも二〇メートル（天平尺に

換算すると六六、六尺) のところに当たる。

ところで東方土壇は塔心礎石の遺存によって塔跡であることが明らかである。西方土壇は、規模としては東方土壇よりやや大きい程度であるが、塔心礎石がなく、塔跡と考えるよりも小金堂的性格をもった建物と考える方が良さそうである。北方建物跡を金堂跡とするか講堂跡とするかは疑問がのこされているが、その北方は丘陵となって背後にさらに一棟の建物を配置する余裕がない。従って若し西方建物を小さいながらも金堂と見た場合には講堂跡である可能性が大きい。回廊跡はまだ充分調査していないが中門から東西に延びてそれぞれ北にまがり、さらに左右に折れて北方建物跡にとり付いていたものと考えられる。」(藤井ほか 1970,pp.18-19)

2 2・3次調査の成果

(1) 調査の経緯と経過

白鳥廃寺跡の寺域内で、農道設置と塔基壇周辺整備が行われることになり、それに先立って香川県教育委員会が確認調査を実施した(2次調査)。2次調査では塔基壇の南辺と東辺を確認し、さらに北辺と西辺の確定を目的として3次調査を行った。

(2) 各調査区の層位と遺構

第8トレンチ

塔基壇中央に残る心礎の南側で南北方向に設定した調査区である。現場での記録によれば花崗土、鋤床の下位は塔基壇の盛土と解釈されている。9～15層は水平方向に細かな堆積が認められるため、版築状の盛土であることが確実である。3～8・16～18層は、9層以下を掘り込んだ後に埋め戻した堆積にも見えるため、心礎の掘りかたとその埋土だろう。12層以下の塔基壇盛土に少量の瓦片が含まれるという注記を重視すれば、2・3次調査で確認された塔基壇は創建後に改築されたものの可能性も残る。

Aトレンチ

3次調査による塔基壇北辺中央部の調査区である。前年度の2次調査で塔基壇南辺・東辺が確定し、心礎を中心に北辺の位置を推定して設定したとみられる。調査区北部では川原石の集石が東西に並んで検出された。

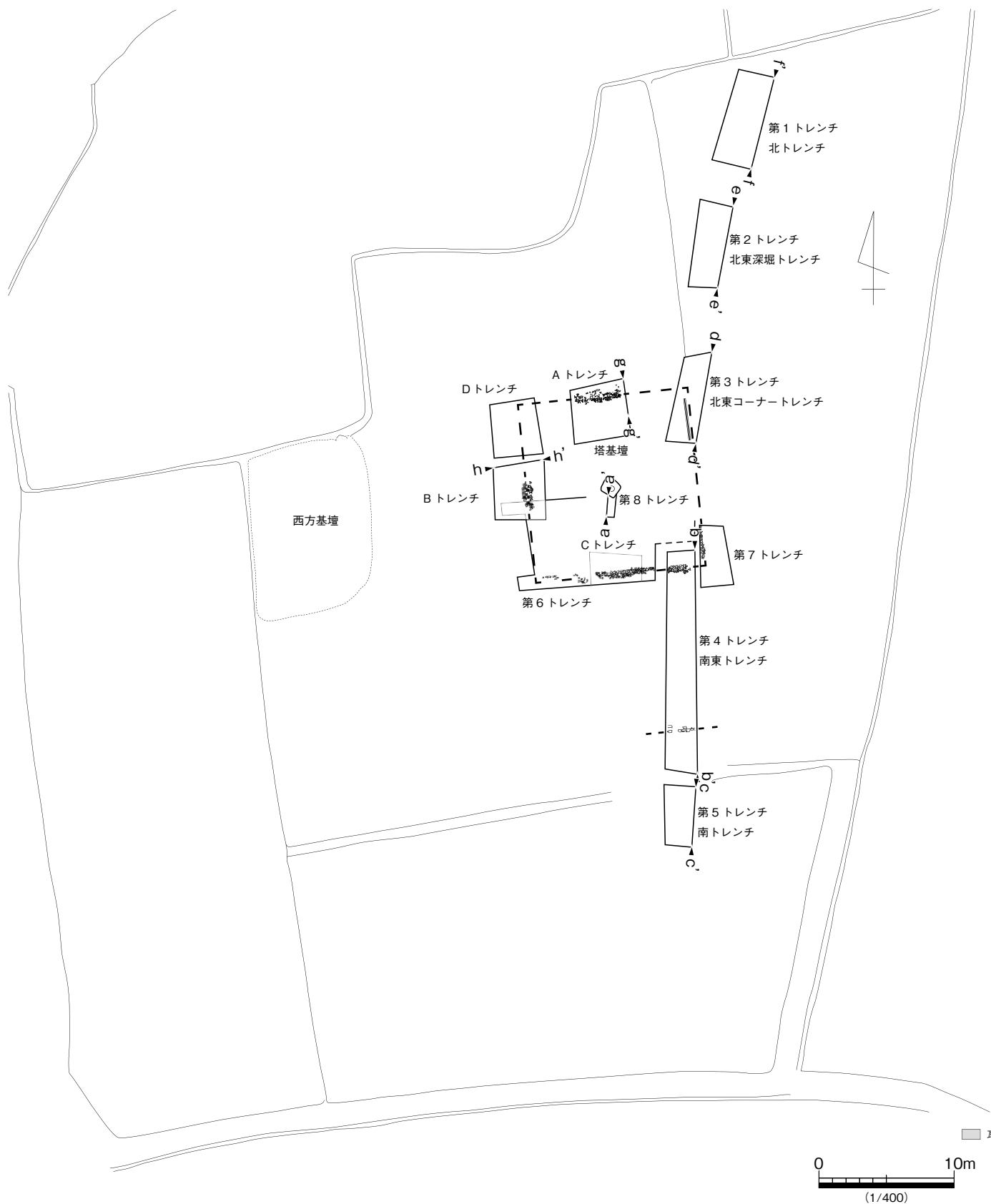
東壁断面では基盤層(V層)の上に盛土とみられる層(IV層)が堆積し、その上位に版築土と判断された複数の水平堆積層(Ⅲ層)がある。Ⅲ層は東壁の南側にしか確認されず、平面で検出した川原石の集石はⅢ層の北側に位置する。集石は基壇裾、または基壇側面に設けられた乱石積の残骸と考えられる。

Dトレンチ

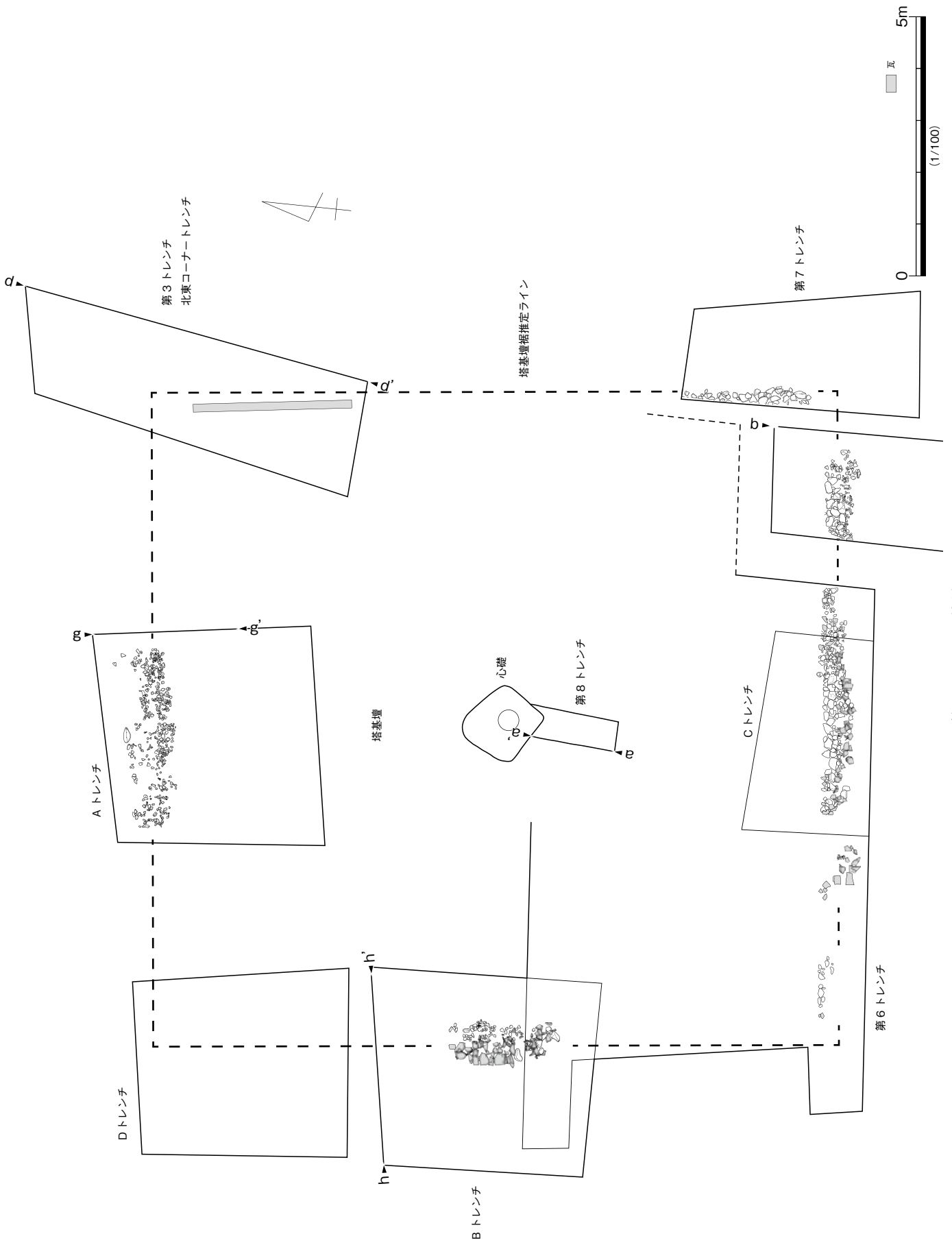
3次調査で塔基壇北西隅にあたる調査区である。「隅丸の状態では基壇を検出できなかった」(大山・松野 1984,p.10)とされるが、図面や写真がないため詳細は不明である。

Bトレンチ

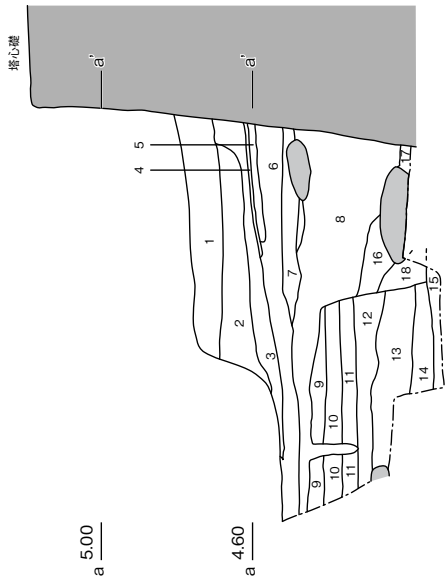
3次調査による塔基壇西辺中央部の調査区である。前年度の2次調査で確認した塔基壇南辺・東辺と心礎から西辺を推測して設定したとみられる。2次調査の第6トレンチで石や瓦の一部を検出していた



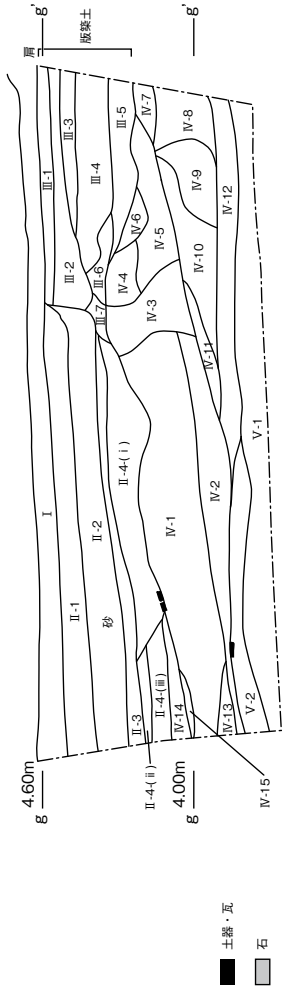
第30図 2・3次調査 調査区位置図



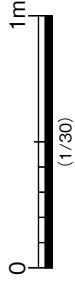
第31図 塔基壇平面図



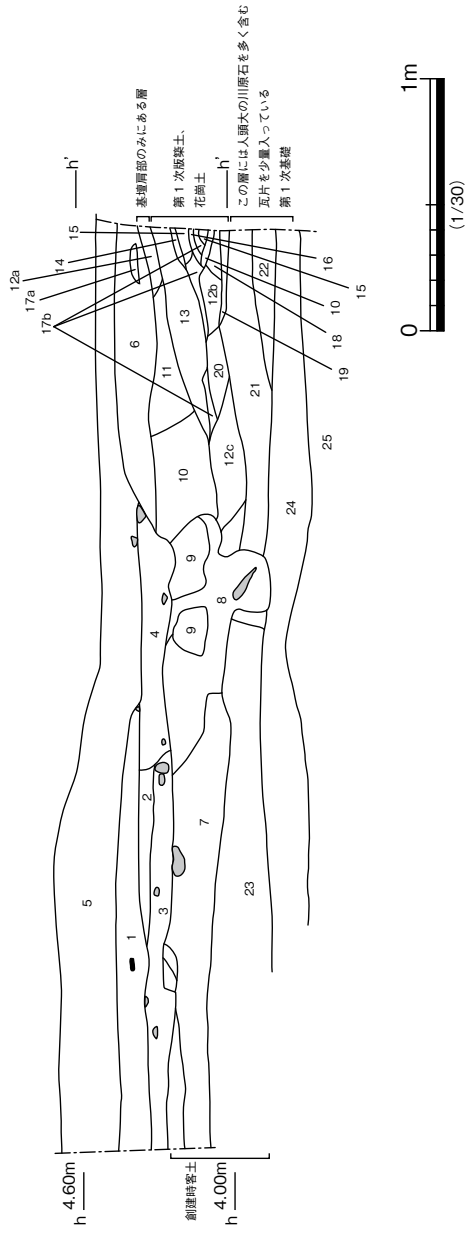
- 1 (耕作土)
- 2 (花崗土)
- 3 明黄褐色土 (花崗土) 【塔基壇盛土】
- 4 灰色砂層 【塔基壇盛土】
- 5 灰茶色砂層 【塔基壇盛土】
- 6 4+5 【塔基壇盛土】
- 7 6の暗い色 【塔基壇盛土】
- 8 灰色砂層 【塔基壇盛土】
- 9 粟石を入れている 黄褐色花崗土
- 10 灰褐色砂質土 【塔基壇盛土】
- 11 淡黄褐色土 【塔基壇盛土】
- 12 こげ茶色砂質土 【塔基壇盛土】
- 13 赤褐色砂質土 【塔基壇盛土】
- 14 灰色砂層 【塔基壇盛土】
- 15 青灰色粗砂 花崗岩ハイランド
- 16 こげ茶色土 【塔基壇盛土】
- 17 灰青色シルト 【塔基壇盛土】
- 18 暗青灰色砂質土 【塔基壇盛土】



- I
- II-1 灰青褐色土 【耕作土】
- II-2 汚青緑色砂層 乾燥すると硬くなる 【古代以降雑積土】
- II-3 青白粘質土 鉄分が出て黄味 【古代以降雑積土】
- II-4(I) 汚青褐色土 砂がある 【古代以降雑積土】
- II-4(II) 下層に比べ青い 瓦、玉砂利包含 【古代以降雑積土】
- II-4(III) 汚青灰色土 左方向からの堆積土 【古代以降雑積土】
- III-1 明黄緑色土 左方向からの堆積土 【塔基壇盛土】
- III-2 上層に比べ緑色なし 成壤土 【塔基壇盛土】
- III-3 白茶色 成壤土 【塔基壇盛土】
- III-4 こげ茶色土 成壤土 【塔基壇盛土】
- III-5 褐色+下層の青色砂 成壤土 【塔基壇盛土】
- III-6 III-2に鉄分沈着 成壤土 【塔基壇盛土】
- III-7 緑色粘質土+鉄分沈着 成壤土 【塔基壇盛土】
- IV-1 灰青緑色砂質土 【掘り込み地盤?】
- IV-2 上層より暗い色 上層と同質 【掘り込み地盤?】
- IV-3 灰青色砂質土 【掘り込み地盤?】
- IV-4 IV-3に比べ褐色味あり 【掘り込み地盤?】
- IV-5 IV-4よりさらに褐色が強い 【掘り込み地盤?】
- IV-6 灰青色粘質土 【掘り込み地盤?】
- IV-7 【掘り込み地盤?】
- IV-8 IV-10と同じ 【掘り込み地盤?】
- IV-9 IV-8, IV-10に比べ緑色が無い 【掘り込み地盤?】
- IV-10 暗緑灰青色砂質土 【掘り込み地盤?】
- IV-11 IV-12に比べやや緑色をおびる 【掘り込み地盤?】
- IV-12 青灰色砂質土に下層の黒灰色粘質土が混入 【掘り込み地盤?】
- IV-13 IV-1に比べ黄色味強い 【掘り込み地盤?】
- IV-14 Iと同質 暗青緑色 【掘り込み地盤?】
- IV-15 白い粒含む 左方向からの堆積土 【掘り込み地盤?】
- V-1 黒灰色粘質土 炭化木を多く含む 加工木1点出土 【塔基壇】
- V-2 V-1と質は同じ V-1に上層の青灰色砂質土混入 【塔基壇】

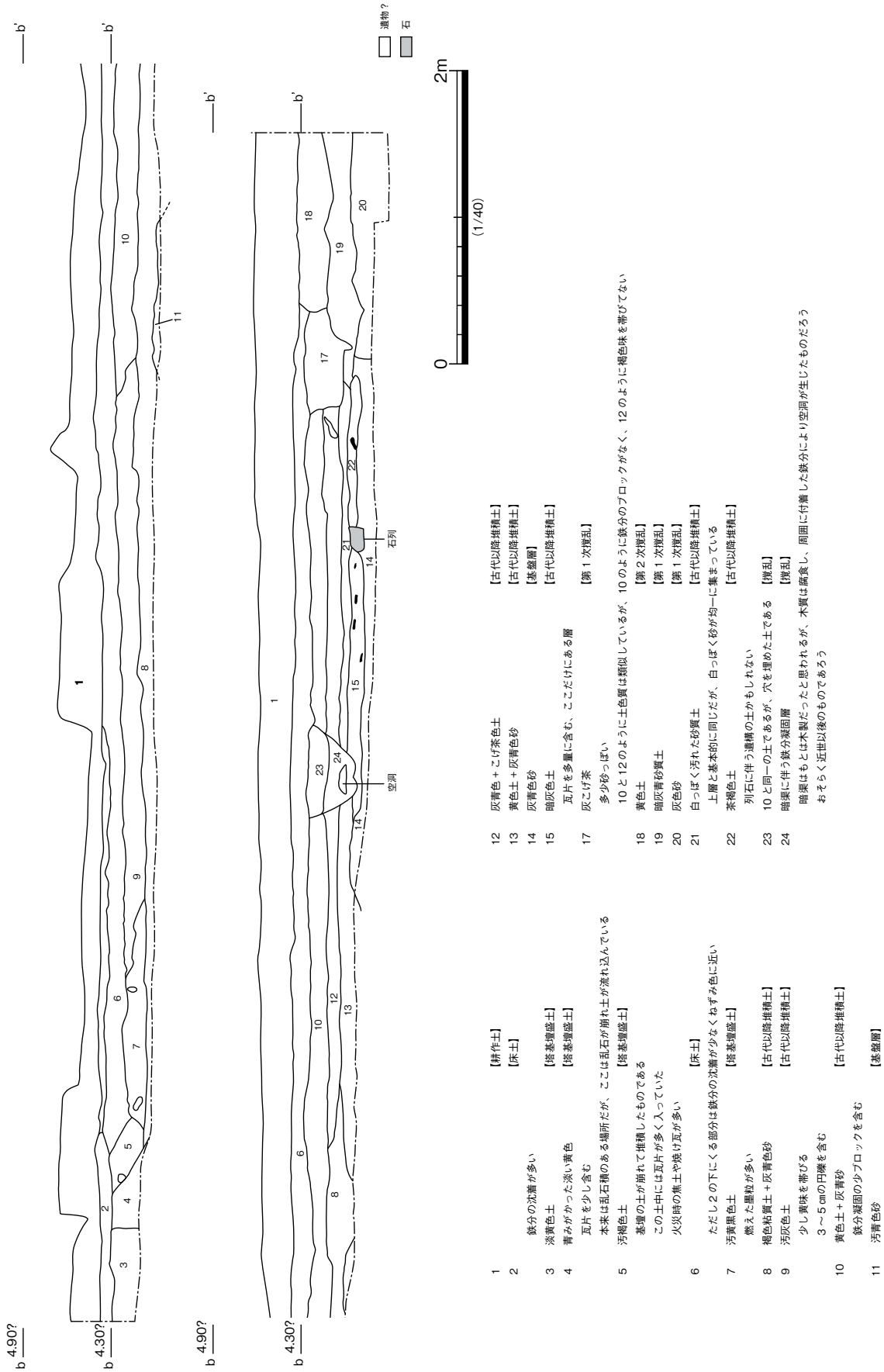


第32図 第8トレンチ・Aトレンチ断面図

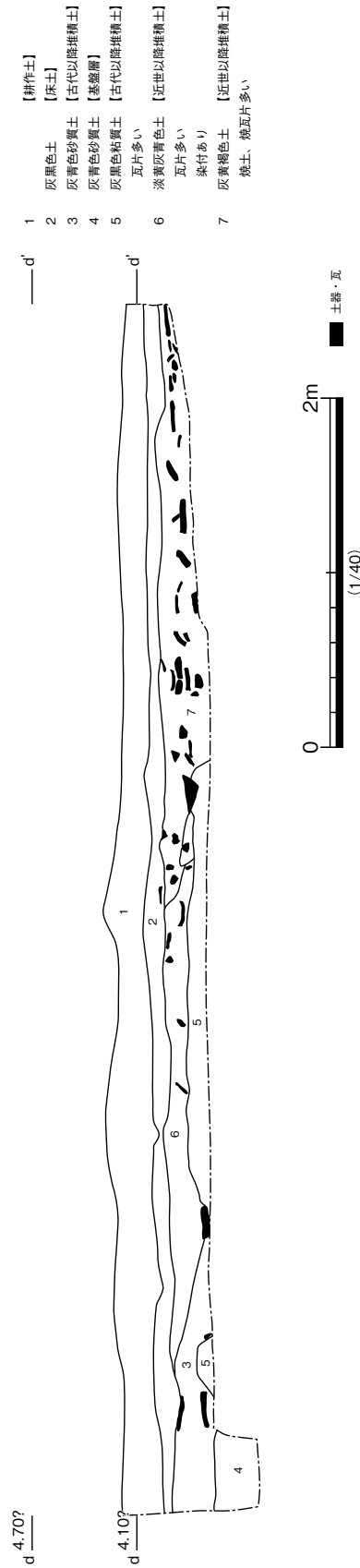
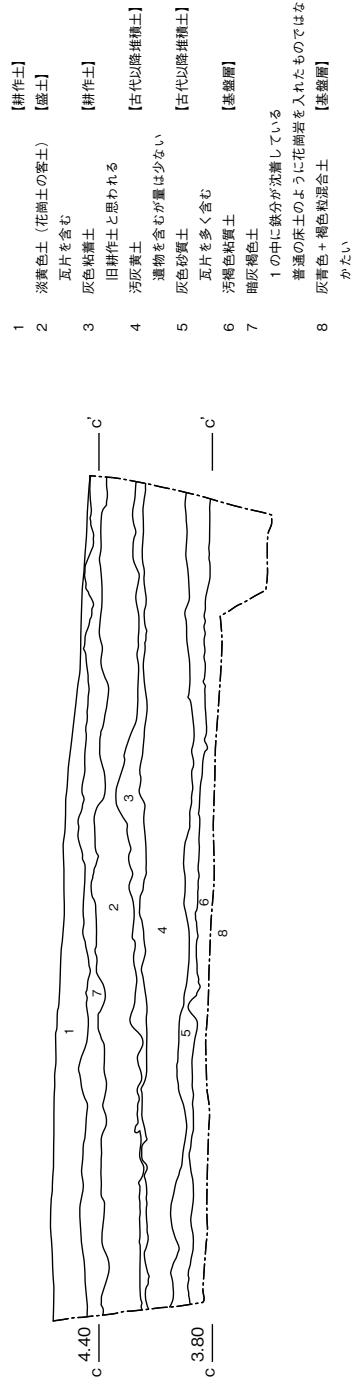


1	灰黄色土 乾燥すると硬い 玉砂利、瓦片を含む	【盛土?】	14	淡黒褐色土	【塔基壇盛土】
2	灰黒緑色土	【古代以降堆積土】	15	茶色	【塔基壇盛土】
3	灰緑色砂質土	【古代以降堆積土】	16	灰色	【塔基壇盛土】
4	淡黄 + 灰色土 玉砂利多い	【古代以降堆積土】	17a	赤褐色土	【塔基壇盛土】
5	薄青緑色土	【耕作土】	17b	赤褐色土	【塔基壇盛土】
6	花崗土の傾 土壌上面	【塔基壇盛土】	18	淡緑	【塔基壇盛土】
7	灰色砂質土	【細り込み地業?】	19	こげ茶	【塔基壇盛土】
8	鉄分が沈着し褐色味を帯びる 灰色砂質土	【遺構?】	20	汚緑褐色土	【塔基壇盛土】
9	少し褐色味 褐色花崗土ブロック	【遺構?】	21	灰黒色砂質土	【細り込み地業?】
10	灰黒色土	【塔基壇盛土】	22	21層に比べ褐色味を帯びる	【細り込み地業?】
11	薄い緑褐色土	【塔基壇盛土】	23	こげ茶色砂質土	【細り込み地業?】
12a	灰緑色土	【塔基壇盛土】	24	黒灰色砂質土	【細り込み地業?】
12b	灰緑色土	【塔基壇盛土】	25	淡緑色土	【縁部層】
12c	灰緑色土	【細り込み地業?】		硬い	
13	灰褐色土	【塔基壇盛土】			

第33図 Bトレンチ断面図



第34図 第4トレンチ (南東トレンチ) 断面図



第35図 第5トレンチ (南トレンチ)・第4トレンチ (北東コーナートレンチ) 断面図

のであれば、これらを根拠に西辺を推測したことになるが、第6トレンチ西部の記録や写真がないため詳細は不明である。調査区中央やや南東寄り、南北に並ぶ川原石の集石と瓦群が検出された。図面で判断する限り、多くの瓦は集石上かつ集石の西側にあるようだ。

北壁断面の図面によれば、基盤層（25層）上の12c・21・22・24層は多量の人頭大の川原石と少量の瓦片を含む「第1次基礎」とされる。その上位の12b・13～16・17b・18～20層は「第1次版築土」とされ、細かな堆積の単位が記録されている。当該層は版築による盛土としていいだろう。6・10・11・12a・17a層も基壇構成土とみられるが、版築状の堆積ではないため、流れた土の可能性もある。「創建時客土」とされる7・23層は、塔基壇盛土との先後関係が不明だが、おそらく版築状の盛土以前に盛られた土で、掘り込み地業に伴う層の可能性もある。2～4層は古代以降の堆積層のため、基壇の高まりは東側にある。集石は、この高まりの西側に位置するため乱石積の痕跡だろう。また、瓦群は本来塔に葺かれていたものと考えられる。

第6トレンチ・Cトレンチ

第6トレンチは心礎の南側、塔基壇の南辺に設定された2次調査による調査区である。明確な範囲を示す図がなく、また調査区名も記録されていなかったため、本稿執筆時に調査区範囲の推定を行った。南東トレンチで検出された塔基壇南辺の延長箇所として設定された調査区だろう。調査区南部で集石と瓦群が一行に並ぶように検出された。瓦群は集石上、または集石の南に位置する傾向がある。

3次調査Cトレンチは、第6トレンチで検出した集石の再確認を目的とした調査区である。

第4トレンチ（南東トレンチ）

2次調査による南北に長い調査区で、農道予定地に設定された。調査区北端部付近では小礫群の上に直径20cm程度の川原石（砂岩）が東西に並べられていた。2段以上残存している箇所はない。これらは塔基壇の南辺にあたる乱石積の残骸だろう。東壁断面でも塔基壇盛土が確認されている（3層）。4・5層は塔基壇の崩落土とみられるが、4・5層間に7・8層を含むことから崩落土の堆積に時間差を認めうる。注記には5層が瓦を多量に包含し、焼土や二次焼成の瓦も含むとある。

調査区南端部付近では直径25cm程度の河原石（砂岩）が東西に並んで、南側に面をもつように検出された。東壁断面によれば、この列石は基盤層直上に設置されている。また列石の北側には幅約1mで瓦が集中していた。

第7トレンチ

南東トレンチの北東に位置する2次調査の調査区である。南東トレンチの塔基壇南辺と北東コーナートレンチの瓦列を結ぶ位置での塔基壇南東角の検出を目的とした調査区だろう。調査区北西部で南北に並ぶ集石と瓦群が検出された。集石と瓦群は塔基壇東辺を示す遺構と判断できる。

第3トレンチ（北東コーナートレンチ）

2次調査の調査区で、農道予定地に設定された。調査区南部で南北方向に並ぶ瓦群が検出された。写真では川原石も散見される。Aトレンチ、2-7トレンチの成果と合わせれば、瓦群は塔基壇東辺を示す蓋然性が高い。

第5トレンチ（南トレンチ）

農道予定地に設定された2次調査の調査区で、南東トレンチの南に位置する。基盤層直上に遺物を含む層が堆積するが、時期は特定できない。

第2トレンチ（北東深堀トレンチ）

農道予定地に設定された2次調査の調査区で、北東コーナートレンチの北に位置する。基盤層直上から近年の旧耕作土までの間に古代以降とみられる層が堆積するが、時期は特定できない。

第1トレンチ（北トレンチ）

農道予定地に設定されたトレンチで、北東深堀トレンチの北に位置する。北東深堀トレンチと同じく、基盤層直上に堆積する層の時期特定は困難である。

(3) 各調査区の遺物

第8トレンチ（塔基壇）

1は塔基壇盛土中から出土した須恵器杯である。取り上げ時の記録には「版築中」とある。高台が外側に踏ん張り、小谷窯跡分類(信里 2002)の杯 D3 または杯 D4 に該当する。生産地では小谷 1・2号窯跡、打越窯跡出土資料と同一型式で、小谷窯跡様相 3 を示す。様相 3 は 7世紀末～8世紀初頭にあたり、塔基壇構築の上限をこの時期におくことができる。

Aトレンチ（塔基壇北辺）

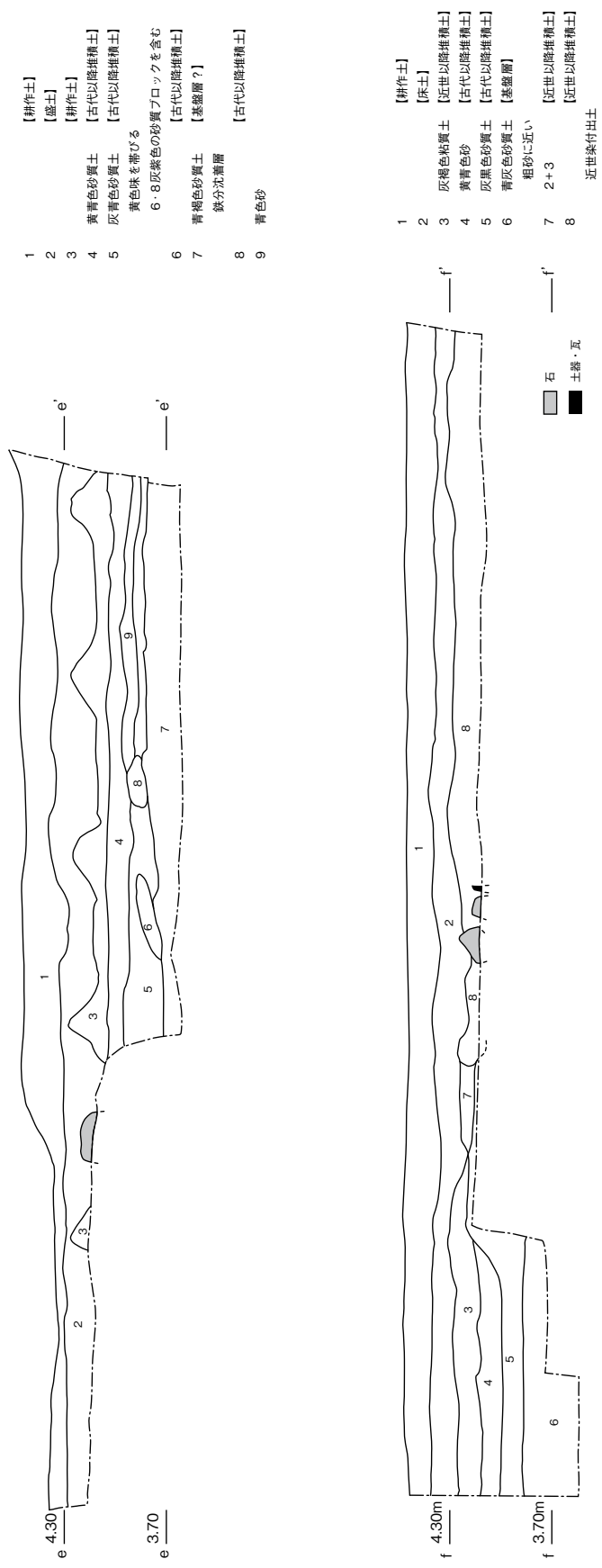
2～4の取り上げ時の記録には「4層」とあるが、この「4層」が断面図のどの層に対応するかは不明である。2は軒丸瓦でSR105（註2）である。軒丸瓦3の瓦当は失われている。4は破片だが、おそらく四重弧文軒平瓦のSR201だろう。

Dトレンチ（塔基壇北西隅）

5の須恵器甕の取り上げ時の記録には「第2層」出土とあるが、Dトレンチは断面図がないため出土位置が特定できない。

Bトレンチ（塔基壇西辺）

6～9の取り上げ時の記録には「基壇肩」または「土壇肩」とあるため、これらは推定塔基壇西辺付近からの出土と推測される。6は八葉複弁蓮華文軒丸瓦SR101で、瓦当以外は残存しない。7～9は四重弧文軒平瓦のSR201で、いずれも凹面には丁寧な板ナデが認められる。10の記録には「灰黒色粘質土」出土とあるが、断面図のどの層に対応するかは不明である。10は均整唐草文軒平瓦で、唐草の先端部が比較的しっかり巻いていることからSR203Aに該当する。顎下部と凸面には格子目タタキが認められる。均整唐草文軒平瓦SR203Aと推測される11・12は、「第2層」で取り上げられている。基壇外側の古代以降の堆積土からの出土であろう。15～17は「基壇肩」で取り上げられているため、推定塔基壇西辺付近からの出土とみられる。軒平瓦16は珠文部分のみが残存し、型式の特定は難しい。平瓦



第36図 第2トレンチ (北東深堀トレンチ)・第1トレンチ (北トレンチ) 断面図

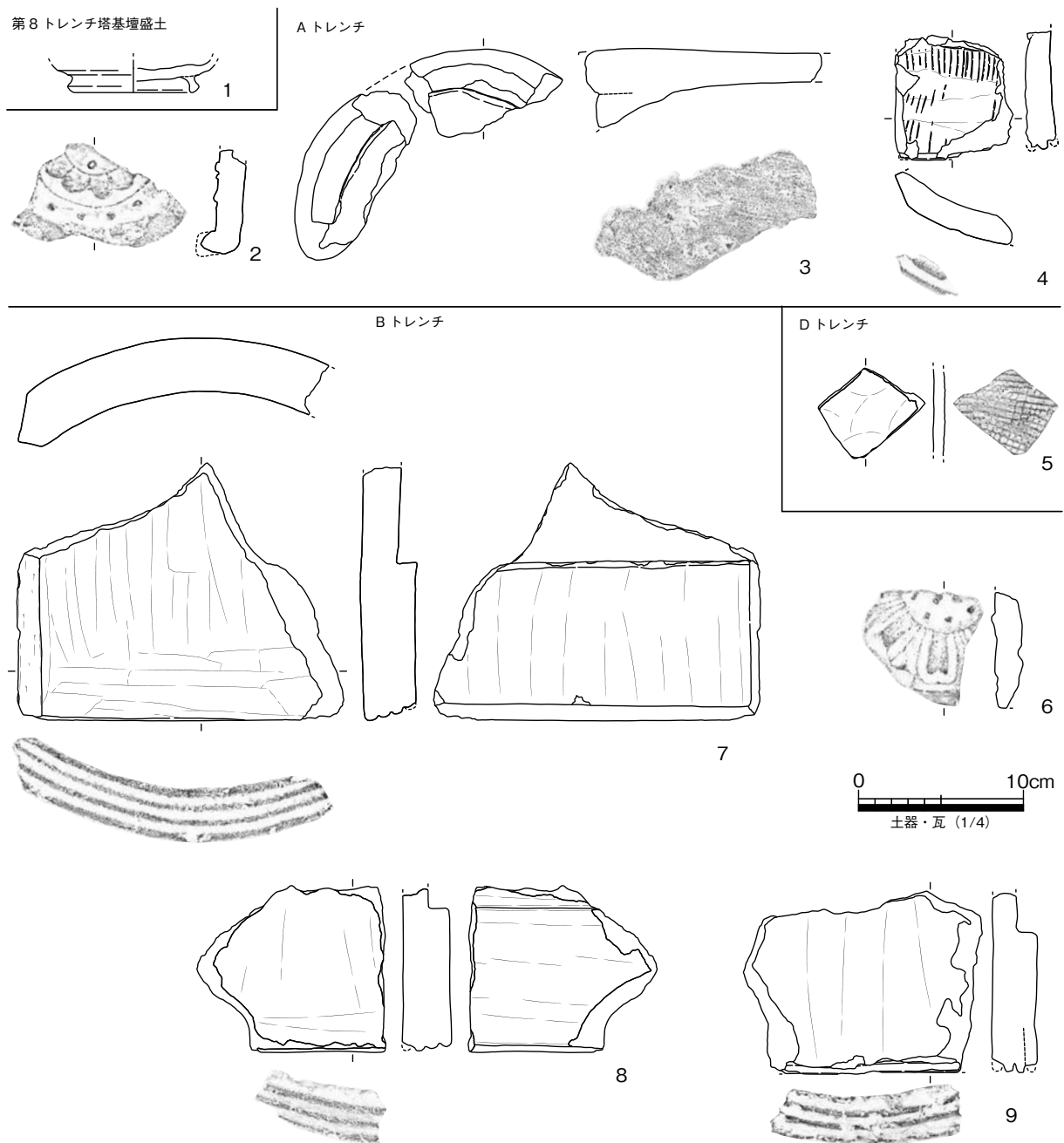
17は凸面に格子目タタキが残る。

C トレンチ (塔基壇南辺)

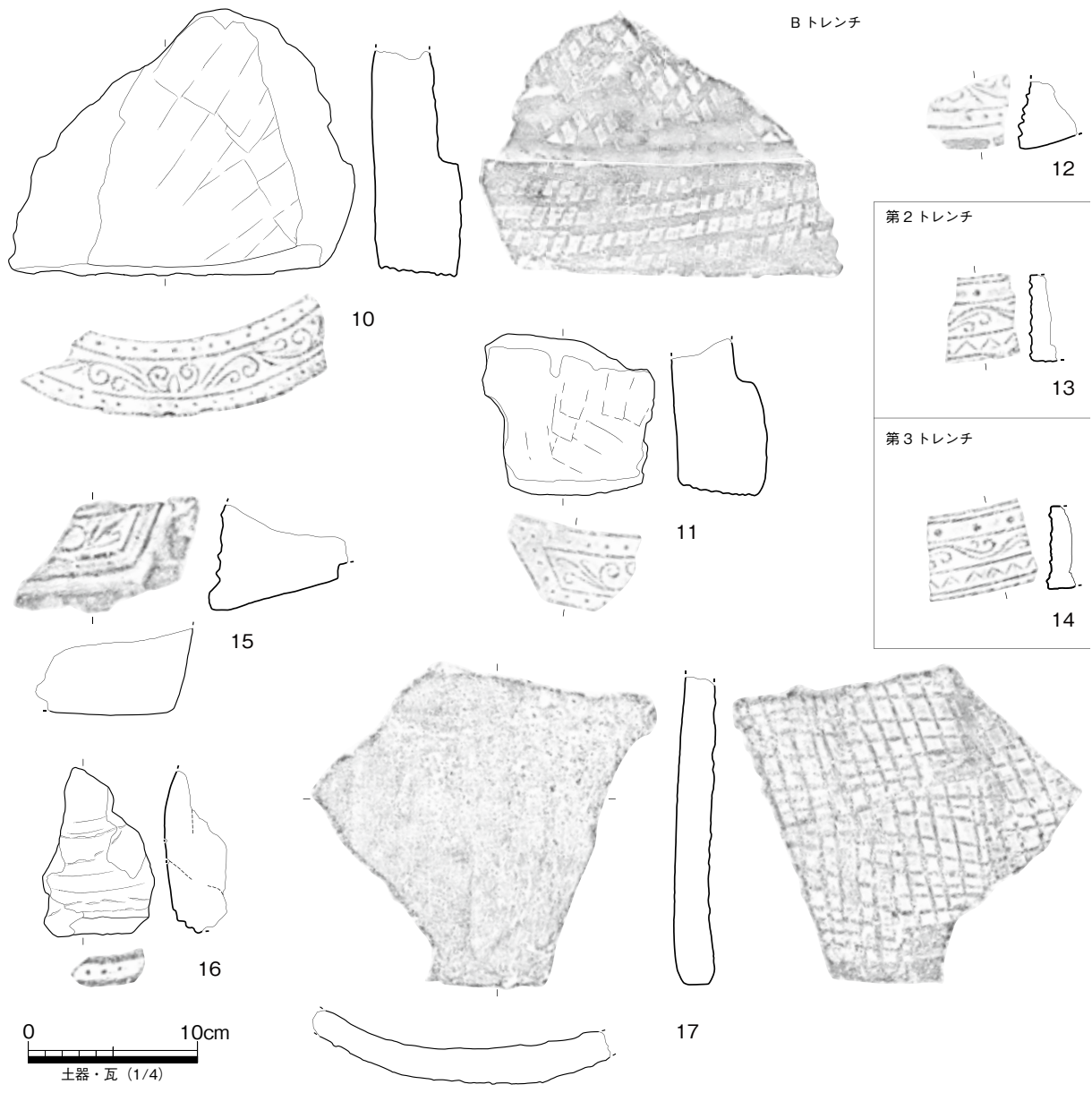
18～21の取り上げ時記録には「土壇肩」「基壇肩」とあるため、いずれも塔基壇南辺付近の出土と判断できる。18は須恵器壺の底部だろう。19は八葉複弁軒丸瓦 SR102 か。軒平瓦 20の瓦当は剥落している。凹面には布目が残る。焼成は良好である。丸瓦 21は凹面に布目が認められる。

第7トレンチ (南東コーナートレンチ、塔基壇西辺南部)

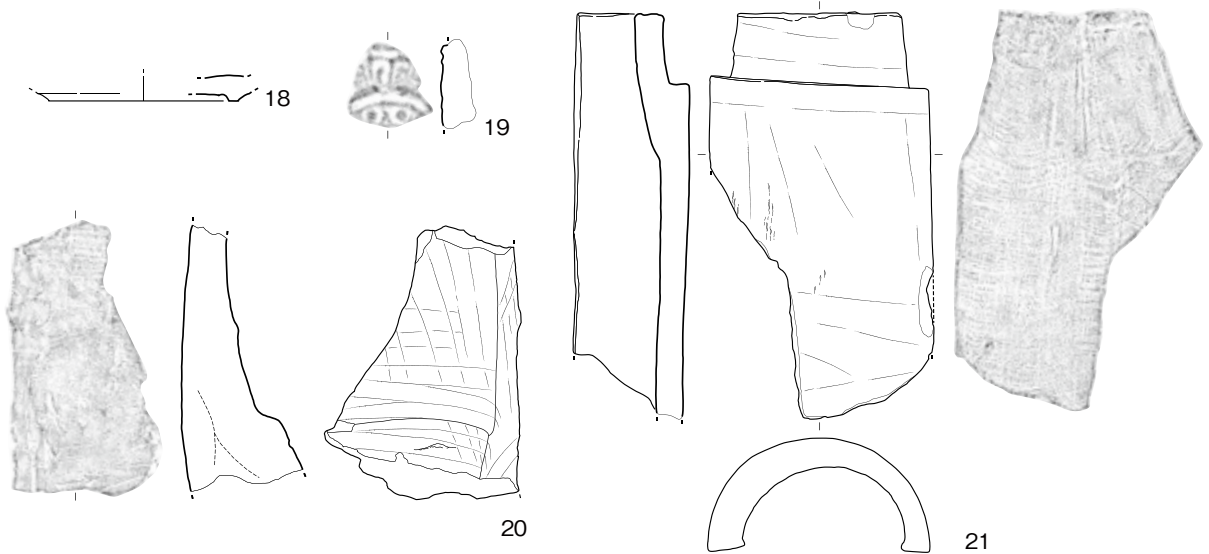
22～39の出土位置は「塔土壇南東コーナー」「南東コーナー塔」「南東コーナー」のいずれかであるため、塔基壇東辺南端付近の出土と推測される。軒丸瓦 22はSR102とみられる。軒丸瓦 23・24は



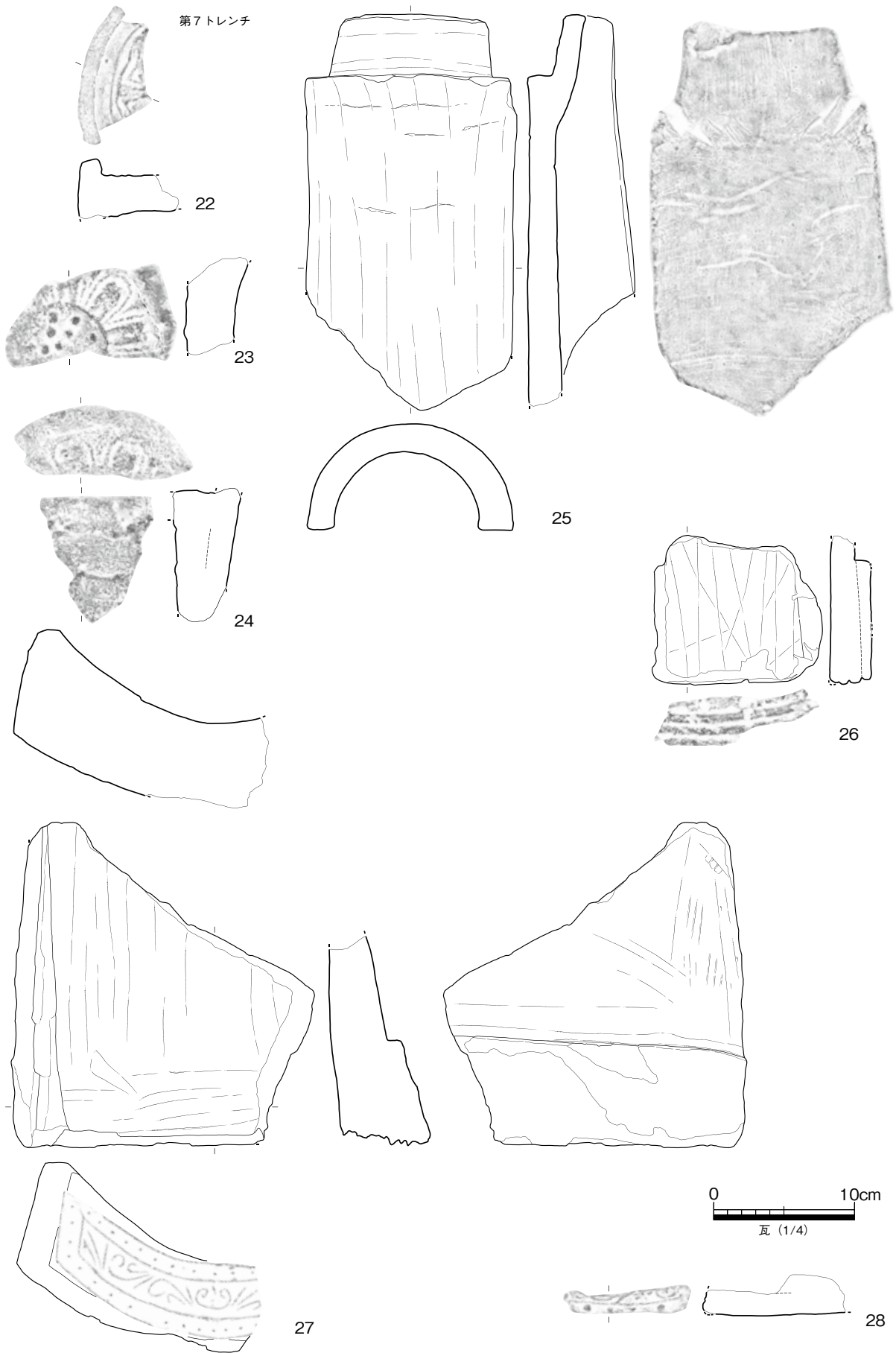
第37図 第8トレンチ・Aトレンチ・Bトレンチ・Dトレンチ 出土遺物実測図



C トレンチ

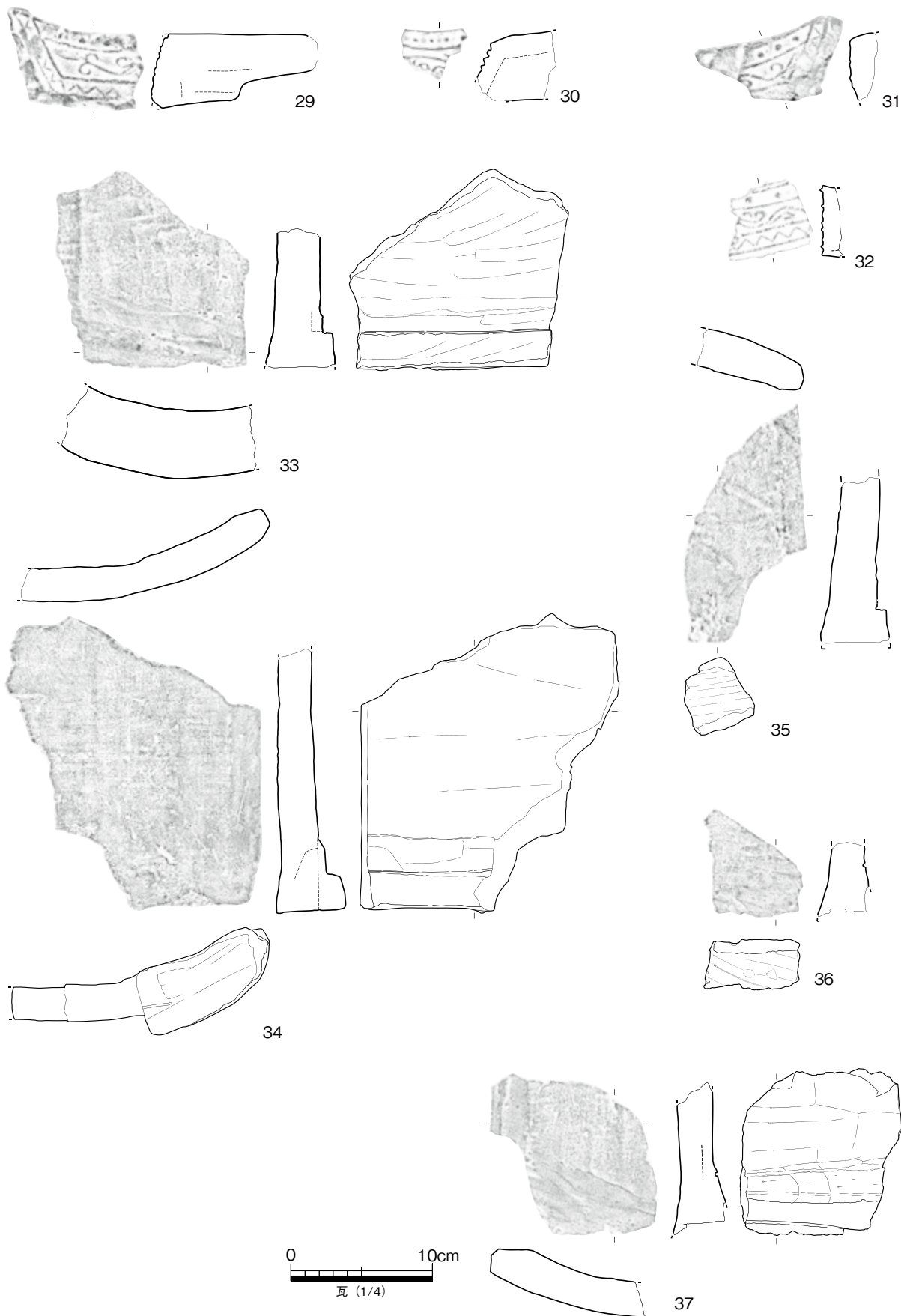


第38図 B トレンチ・C トレンチ 出土遺物実測図



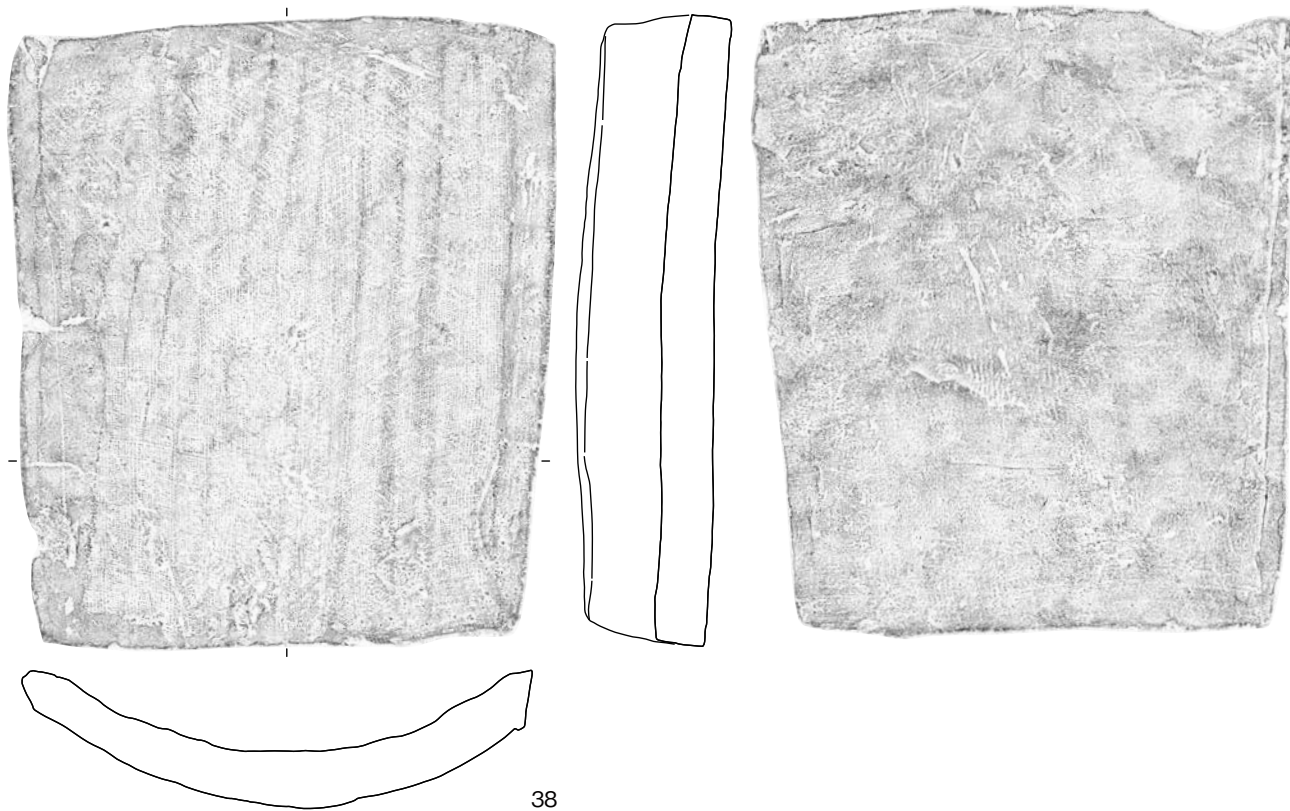
第39図 第7トレンチ 出土遺物実測図 1

第7トレンチ



第40図 第7トレンチ 出土遺物実測図 2

第7トレンチ



0 10cm
瓦 (1/4)

第41図 第7トレンチ 出土遺物実測図3